

洗足学園音楽大学

グリーン・タイ
ウインド・アンサンブル
演奏会

Senzoku Gakuen College of Music Green-Tie Wind Ensemble

～ ティモシー・レイニッシュ 80歳記念 ～

戦争と平和

War and Peace

2018年7月1日[日]

15:00開演 | 14:30開場

洗足学園 前田ホール



洗足学園音楽大学

洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブルと、同バンド・ディレクターの伊藤康英氏にお招きいただき、私の80歳をお祝いしていただけることは、大いなる名誉であります。洗足の吹奏楽は、2005年のシンガポールで開催されたWASBE(世界吹奏楽大会)に参加しました。そのとき、今日最高のバンド・トレーナーまた作曲家の一人である伊藤康英さんの指導のもと、音楽的な発展を見ることができたのは魅力的なことでした。そして本日のコンサートには、昨年に引き続き、東京のブリティッシュ・カウンシル駐日代表であるマット・バーニー氏にもお越しいただき、大変に光栄に存じます。

さて、本日の祝祭的なプログラムを組むにあたり、私の親しい友人たちの作品を取り揃えました。「戦争と平和」のタイトルのもと、2003年イラク戦争からの2作品、アメリカの作曲家ディビッド・デル・トレディチの『戦時に』と、ニュージーランドの作曲家クリストファー・マーシャルの『武装した人(ロム・アルメ)』を取り上げ、戦争の影を色濃く描きます。戦争や、市民の不安は、悲しいことに絶えず存在しています。

本日のコンサートのために、私のホストを務める伊藤康英氏が作曲してくださった『タイム・イントゥ・ミュージック』を初演します。さらにルイス・セラノ・アラルコンによるフラメンコとジャズの世界への傾倒が見られる素晴らしいサクソフォーン協奏曲『コンチェルトタンゴ』第1楽章をお届けします。

残る二つのイギリスからの作品は、対照的であります。私が1996年にアダム・ゴープ氏に委嘱した華麗な『アウェイディ』、その興奮冷めやらぬ作品のあとには、私の最高の友人かつ音楽仲間であったガイ・ウールフェンデンの叙情的かつ牧歌的な『イリュリア人の踊り』。この作品は、彼が35年間、劇場の音楽監督を務めていたシェイクスピアとストラットフォード・オン・エイヴオン地方のウォリックシャーの田園の風景を描き出した作品です。

ありがとうございます。

ティム・レイニッシュ
www.timreynish.com

What an honour to be invited to celebrate my 80th birthday with the artists of the Senzuku Gakuen College of Music Green-Tie Wind Ensemble and their director, Yasuhide Ito. I first came across the group at the WASBE Conference in 2005 in Singapore, and it has been fascinating to observe their musical development under the mentorship of Yasuhide Ito san, who is surely one of the finest band trainers and composers of today. Once again we are delighted to be honoured by the presence of Matt Burney, Director of the British Council in Tokyo.

We have devised a celebratory Jubilee programme with a number of pieces by close friends; it is subtitled War and Peace and features two works from 2003, both written in the shadow of the invasion of Iraq, sadly appropriate in these dark days with the threat of war and civil unrest constantly present, the American composer David del Tredici's *In Wartime* and New Zealander Christopher Marshall's *L'Homme Armé*.

For this concert my host, Yasuhide Ito has written *Time-Into-Music* which will receive its premiere, and will be followed by a brief nod to the world of flamenco and jazz, the first movement of Luis Serrano Alarcon's wonderful saxophone concerto, *Concertango*. For the rest, we play two contrasting British pieces, the brilliant *Awayday* by Adam Gorb which I commissioned in 1996, and after the excitement, something lyrical and idyllic by my best man and best musical mate, Guy Woolfenden, his *Illyrian Dances* which paints a picture of rural Warwickshire, the county of Shakespeare and Stratford-on-Avon where Guy was Director of Music at the theatre for thirty five years. Arigato.

Tim Reynish
www.timreynish.com

昨年に引き続き、ティモシー・レイニッシュ氏をお迎えできたのは、望外の喜びであります。

昨年、ティム(以下、「ティム」と愛称にて記します)からグリーン・タイが学んだことは大きかった。それについては、『バンドジャーナル』誌2018年5月号から7月号にわたった連載「ティムに学ぶ吹奏楽の極意」からもわかるであろう。先日、イギリスにてティムにお会いした際に、「われわれは『バンド』をやっているんじゃなくて『音楽』をやっているんだ」というメッセージをグリーン・タイのメンバーにいただいた。加えて、昨年のグリーン・タイの演奏が素晴らしかったことは、イギリスはじめヨーロッパの吹奏楽界の話題の種になっているらしい。英語で吹奏楽についてインターネットで調べると必ずティムのサイトに行き着く、というほどの博識であり、また欧米などにて絶大な影響力を持つ。

日本へは、1995年、浜松で開催されたWASBE(世界吹奏楽大会)に際してRNCM(王立ノーザン音楽大学)吹奏楽団を率いて初来日、その折には、浜松以外でもコンサートを指揮した。そして、昨年の本グリーン・タイ ウインド・アンサンブルの招聘により、2度目の来日を果たした。今回が3度目の来日となる。

今年3月9日にティムは傘寿(80歳)を迎えられた。還暦(60歳)の時にもティムにはいくつかの作品、たとえば昨年演奏したゴープの『イディッシュ・ダンス』などが捧げられており、このたびの傘寿に際しても、ティムがしばしば愛奏するアラルコンらがお祝いの作品を書いている。(そして私も作曲した)。まさに祝祭一色、というところであるのだが、ティムが提唱した今回のプログラムは「戦争と平和」。戦争の暗黒から平和に向けての希求が本日は語られる。

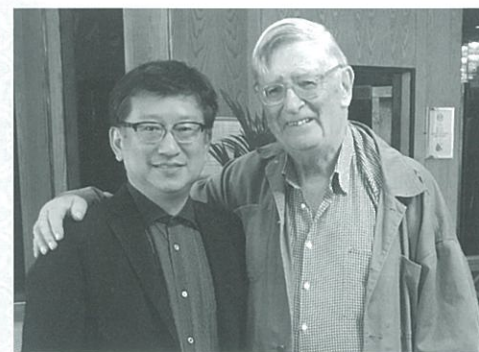
さて、ご挨拶が遅くなりました。本日はご来場いただきありがとうございます。

4つの吹奏楽団を擁する洗足学園音楽大学の中で、このグリーン・タイは、運営する私自身の意図を大きく反映させた選曲や指揮者陣、それから学生たちの音楽的な表現を特色とすると思っています。吹奏楽の可能性を追求したいと思っています。今年度も、レイニッシュ氏とボストック氏というイギリスを代表するお二方をお迎えし、コンセプトに満ちた吹奏楽をお届けしています。

本日のコンサートへの忌憚ないご高評を賜りたく存じます。また、ぜひ次回12月11日にもお運びいただけましたら幸いです。

なお、このたびのティムの招聘につきましては、ティムの愛弟子であり、本グリーン・タイ ウインド・アンサンブルを3度にわたり指揮していただいた指揮者・藤岡幸夫氏の多大なるご尽力を得て実現しました。ここに記して感謝したいと思います。

洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブル
企画運営責任者
作曲家・本学教授
伊藤 康英



ティモシー・レイニッシュ氏(右)と伊藤康英(左)
2018年5月29日ロンドンにて

A.ゴープ／アウェイデイ (約6分)

Adam Gorb (1958-) / Awayday (1996)

G.ウールフェンデン／イリュリア人の踊り (約11分)

Guy Woolfenden (1937-2016) / Illyrian Dances (1986)

1. ロンド 2. オーバード(朝の歌) 3. ジーグ

1. Rondeau 2. Aubade 3. Gigue

D.デル・トレディチ／戦時に (約18分)

David Del Tredici (1937-) / In Wartime (2003)

讃美歌 - 戦闘行進曲

Hymn - Battlemarch

intermission

L.S.アラルコン／コンチェルタンゴより第1楽章 (約12分)

Luis Serrano Alarcón (1972-) / 1st Movement from Concertango (2004)

アルト・サクソフォーン独奏：荒木 真寛(学4年)

Masahiro Araki : Solo Alto Saxophone

伊藤 康英／タイム・イントゥ・ミュージック (日本初演) (約5.5分)

Yasuhide Ito (1960-) / Time-Into-Music (2018) - Japan Premiere

C.マーシャル／ロム・アルメ(武装した人)変奏曲 (約17分)

Christopher Marshall (1956-) / L'homme Armé, Variations (2003)

本日のコンサートはビデオ収録されており、インターネットあるいはテレビ等にて公開されることがあり、観客の皆様が映る可能性があります。何卒ご理解いただけますようお願い申し上げます。



ティモシー・レイニッシュ(客演指揮)

Timothy Reynish

ケンブリッジ大学卒業後、サドラーズ・ウェルズ・オペラ管、バーミンガム市交響楽団などで首席ホルン奏者を務める。指揮をジョージ・ハースト、チャールズ・グローヴス、エイドリアン・ボルト、ディーン・ディクソン、そしてシエナのキジアーナ音楽院にてフランコ・フェラーラに学んだ。ニューヨークのミロプーロス国際指揮者コンクールの優勝者として、英国の主要なオーケストラを指揮。1975年、王立ノーザン音楽大学の大学院指揮科の助手として招かれ、その2年後に管打楽器科の主任に任命された。同大ではオペラの指揮も手がけ、「フィガロの結婚」「魔笛」「ラ・ボエーム」「期待」やブリテンの数々のオペラを指揮

した。王立ノーザン音楽大学管弦楽団とは、ベートーヴェン、ブラームス、ドヴォルジャーク、チャイコフスキー、ブルックナー、マーラーらの交響曲、リヒャルト・シュトラウスの交響詩、ストラヴィンスキーの「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」、ヴェルディの「レクイエム」、ティベットのオラトリオ「我らの時代の子」などを指揮した。

レイニッシュは、世界屈指のウインド・バンドおよびウインド・アンサンブルの指揮者として知られている。王立ノーザン音楽大学では、ウインド・オーケストラとウインド・アンサンブルを世界最高水準に引き上げ、また著名な作曲家たちに100曲以上の委嘱新作を作曲してもらい、音楽祭にも定期的に出演した。これまでアジアを始め、カナダ、南米、ヨーロッパ、米国でクリニックや講演、客演指揮およびコンクールの審査を行っており、Maecenas Music出版のエディターも務める。国際色に富んだレパートリーを収録した商業レコーディングは17枚におよび、最新盤は米国の沿岸警備隊バンドとの録音である。2015年はシドニー音楽院でウインド・オーケストラの客演指揮者を7週間務めたほか、リスボン音楽院、香港およびドイツで演奏会を行なった。昨シーズンは、ロンドンの王立音楽大学とトリニティー・ラバン大学、イサカ・カレッジ、シンガポールおよび米国などで演奏会を行なった。

Programme Notes

冒頭のティムの言葉にあるように、このプログラムは「戦争と平和」をテーマにしている。

戦時にとロム・アルメ(武装した人)・・・イラク戦争についての2作品。

アウェイデイとイリュリア人の踊り・・・イギリスからの対照的な2作品。

コンチェルタンゴとタイム・イントゥ・ミュージック・・・スペインと日本からティムへの祝祭的平和的な2作品。

さらに、アウェイデイ、イリュリア人の踊り、タイム・イントゥ・ミュージック、ロム・アルメは、ティムのために書かれた作品。

昨年、ティムから寄せられた言葉に、プログラムを組む際に考慮する点として、emotional (情緒的) - musical (音楽的) - intellectual (知的) - technical (技巧的) という4つの条件(頭文字をとってEMIT)を満たすことが大切だとあった。今回もまたEMITを十分に満たした素敵なプログラムとなっている。

日本では、アメリカ由来の吹奏楽作品が多く紹介されてきている。イギリスでは、吹奏楽よりブリティッシュ・スタイルのブラスバンド(金管バンド)が一般的だ。しかし、イギリスをはじめ、ヨーロッパでも吹奏楽は極めて盛んであり、作品も多い。それらが日本にあまり紹介されていないのは残念である。今回のプログラムはおそらく、日本のかなりの吹奏楽ファンでさえ知らない作品が多いであろう。あ、こんな曲があったのか、と目を開かせてくれる作品が多く並ぶ。

(I)

アウェイデイ (A.ゴープ)

awayday

ティモシー・レイニッシュ氏の委嘱により作曲され、1996年11月26日、同氏の指揮、王立ノーザン音楽大学吹奏楽団によりマンチェスターのブリッジウォーター・ホールにて初演。ゴープ作品では日本で最も知られている作品。

ゴープは、ケンブリッジを去ったあと、しばらくはミュージ

カル劇場で「ウェストサイド・ストーリー」の指揮をしていた。最近の WASBE (世界吹奏楽大会) でゴープは、ポピュラー音楽への愛情を次のように語っている。

「クラシックとポピュラー、そう、過去 100 年間にポピュラー音楽の世界で何が起って来たのか、我々は無視できないと確信している。そして、吹奏楽やウインド・アンサンブルは、明らかにビッグバンドやジャズ・アンサンブル、さらにはロック・バンドの要素も持ち合わせている。私自身は、ピアノ、ベースやドラムセットの使用も好んでおり、それで 3、4 作品は作曲した。」

この作品は自由なソナタ形式でできており、はっきりとしたメロディーを持っている。また、作曲者自身編曲したオーケストラ版も成功している。

「コンサートのオープニング用の 6 分のこの曲は、アメリカのミュージカル・コメディの最盛期をイメージしている。簡潔なソナタ形式の中に、東の間の祝日に『すべてから離れた』爽快感や陽気さを表現した。音楽的には、ブロードウェイ・ミュージカルの偉大な時代に敬意を表している。たとえばガーシュウィンやバーンスタイン、ストラヴィンスキーそれからジェームス・ボンドといった面々が、オープントップのスポーツカーに乗って時速 100 マイルで走っていると想像してみよう。そういう作品だ。」

ジェームス・ボンド、さて最近の若者は分かるかな。

そして、「Awayday」とは、「日帰り旅行」の意。

おお、それから「100 マイル」は約「160 キロ」。こりゃずいぶんと速いぞ。(T&I)

アダム・ゴープは、イギリスはウェールズの首都であるカーディフ生まれ。10 歳から作曲を始め、15 歳頃にはピアノ作品を作曲した。1980 年にケンブリッジ大学を卒業、1991 年にはロンドン大学のロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックにて MMus 学位 (音楽修士号) を取得、1993 年にはプリンシパル賞、2004 年には英国アカデミー賞を受賞した。マンチェスターの王立ノーザン音楽大学で作曲学部長を務めた他、アメリカ、カナダ、日本およびヨーロッパ諸国においても後進の指導にもあたっている。

ジャズ等、クラシック以外の要素を多分に含んだ楽曲も多く、独特の音使いやリズムを用いつつも複雑な現代曲といった印象をもたせない曲風が特徴のひとつと言える。(Y)

イリュリア人の踊り (G.ウールフェンデン)

この 3 つの舞曲は、西ミッドランド・アーツの協賛により、イギリスの吹奏楽協会 BASBWE (ブリティッシュ・アソシエーション・オブ・シンフォニック・バンド・アンド・ウインド・アンサンブル) の委嘱により作曲。初演は、1986 年 9 月 26 日、第 5 回 BASBWE 大会において、ワーウィック大学において行われた。ウールフェンデンのよく知られた『ガリモ

フライ』同様、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー・プロダクションのために書いたメロディーをもとにして作曲している。

ヴァイオラ みなさん ここはなんという国ですの

船長 イリリアと申します

(シェイクスピア作「十二夜」第 1 幕 2 場)

以下、ウールフェンデンによる解説。

イリュリアは、古代ギリシャ・ローマ時代に、現在のバルカン半島の西部にあった王国。しかし、シェイクスピアにとっては、イリュリアの正確な位置は重要ではなく、この言葉の響き自体に興味があった。また違い土地への郷愁であったか。シェイクスピアにとってのイリュリアは、決して存在しない「ネバーランド」だが、その見知らぬ土地のための踊りを創造するというアイデアに、私は興味を持った。

第 1 曲「ロンド」の冒頭は 7 小節構造。そこに、特徴あるリズムのひねりが加えられ、さまざまな楽器により強調されつつ変容する。

第 2 曲「朝の歌」はフルートを主とした 3 拍子の穏やかな踊り、最後には夜明けの合唱が聞かれる。

終曲「ジーク」は、8 分の 6 拍子のロンド形式であり、対位的にさまざまなテーマが絡み合う。

この作品を、私の古くからの良き友ティモシー・レイニッシュに献呈する。 www.arielmusic.co.uk (I)

ガイ・ウールフェンデンは、イギリス・サフォーク州の首都であるイプスウィッチに生まれる。キリスト大学、ギルドホール音楽院で音楽を学ぶ。1961 年と 1963 年から 1998 年までロイヤル・シェイクスピア・カンパニーにて音楽監督を務めた他、若手ミュージシャンや俳優を支援するデル・ギルクス記念基金の会長、出版社アリエル・ミュージックの創設者などキャリアは多岐にわたる。吹奏楽作品のみならず、室内楽、オーケストラの他にテレビや映画のための音楽も作曲している。またロイヤル・シェイクスピア・カンパニーでの 37 年間にわたる活動は、彼の作品と現代のシェイクスピア研究どちらにおいても大きな影響を与えた。2016 年没。(Y)

戦時に (デル・トレディチ)

作曲者による解説。

私の初めての吹奏楽作品であるこの曲は、2002 年 11 月 16 日に着手し、2003 年 3 月 16 日、私の誕生日に完成。その 4 ヶ月間は、私が経験したアメリカ史上重要な期間でした。劇的なことに、11 月には、議会にて戦争の必要性が承認され、3 月にはそれが現実となった衝撃があっ

た。テレビが鳴り響き、次々とニュースが届く中、しかしながらテレビを消すことには少しの罪悪感を感じながら、私は作曲を続けた。このような時に作曲を行うこととは、無関係の追求と思われるかもしれない。世界の動乱にも関わらず私を穏やかに、安定させ、さらに憂鬱な状態にさせる。

この作品は、「賛美歌」と「戦いの音楽」の 2 つが繋がって構成されている。

賛美歌は、コラール前奏曲ふうの音楽のもと、対照的な賛美歌『Abide with Me』(「共にいてください」の意)の断片が埋め込まれている(譜例 1)。クライマックスのち、このよく知られた賛美歌は、装飾を取り払った形で現れる。堂々とした音楽が進みつつ、賑やかな当初の音楽は次第に戻り、それが賛美歌の上に重ねられるのはちょっとした驚きであろう。音楽学の用語を用いれば、「クオドリベット」。これは、音楽の世界を広げるだけではなく、闘いの前の祈りの力が結集したものといえよう。

譜例 1 賛美歌 39 番「日暮れて四方は暗く」 Abide with Me

Andante W.H.Monk

スネアドラムの長く不気味なロールに導かれ、確固とした足取りの中、「戦いの音楽」は戦争開始を告知する。

波のように脈打つ一連の 4 小節フレーズのエネルギーの反復は、常に行きつ戻りつする。寄せては返す波のように、新たな和音が容赦なく侵食してくる。あたかも、狂乱した巨大な波が増強する嵐のように。そして、ペルシャの国歌である『Salamati Shah! (サラマティ・シャ)』(「王の健康」の意)と運命的に対決することとなる(譜例 2)。そこには、ワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』からも引用されている(譜例 3)。

譜例 2 ペルシャ国歌「Salamati, Shah!」 A.J.B.Lemaire

Allegretto

譜例 3 楽劇「トリスタンとイゾルデ」冒頭 R.Wagner

Langsam und schmachkend. R.Wagner

音楽語法の中で東洋と西洋が戦うこの行進曲の「トリオ」の部分で、この楽章のクライマックスを作り上げる。圧倒的な音響の中ですっかりと洗い流されたのち、冒頭のマーチが戻ってくる。戦争に疲弊しつつも、全力を振り絞って再現されるマーチ、そして惨憺たる呻き声が。

この作品は、私の良き友人であり仲間である作曲家、ステイーブン・パークに献呈。

以上が作曲者による解説。

さて、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』の引用について若干の付記を。

冒頭の短 6 度の跳躍、2 小節目の調性の不安定な和音、2 小節目から 3 小節目にかけての半音階のメロディー、こうしたものが特徴の主題であり、その独特さゆえ、これまでもさまざまな作品に引用されてきている。楽譜に書かれた「Langsam und schmachkend」というドイツ語の表記に留意してみよう。Langsam は「ゆっくりと」の意だが、「schmachkend」には「(飢え、渇きなどに)苦しんで」「渴望して」、はたまた「やつれはてて」「思い悩むように」など複雑な心境を表している。

このディ・トレディチの作品では、戦時下において愛を渴望するが、マーチの喧騒のうちにそれは否定され、最後により愛を見出すのだが、それも敢え無くサイレンの轟音に打ち消されてしまうのだろう、と私は想像する。さてみなさんはこの音楽に何を聴きますか。何を感じますか。

(I)

デイヴィッド・デル・トレディチはアメリカ合衆国出身。新ロマン主義の作曲家として知られる。17歳のころサンフランシスコ交響楽団と共演しピアニストとしてデビュー。カルフォルニア大学バークレー校卒業後、プリンストン大学にて作曲を学ぶ。初期の作品から現在に至るまで、文学的な題材の作品が多い。1980年には『少女アリス』の第一部『夏の日の思い出』にてピューリッツァー賞を受賞、その他にもグッゲンハイム奨学金など数々の名誉に輝き、アメリカ文芸アカデミー会員にも選ばれている。

(Y)

コンチェルトより第1楽章 (L.S.アラルコン)

第一に、この作品はフュージョン(融合)である。一つには、古典的なシンフォニックな楽器とジャズ・トリオ(ピアノ、ベース、ドラム)との組み合わせによるフュージョン。この2つのグループの中で、サクソフォーンのソリストは絶対的な主人公となる。一方、音楽のスタイルのフュージョン。20世紀初めの交響楽からジャズの要素に至るまでの、様々な様式の回想を見いだすことができる。とりわけ、タンゴは常に中核を担い、特にA.ピアソラ(1921-1992)の有名な『リベルタンゴ』や『ヴィオレンタンゴ』が発想の源となっている。

全曲は3楽章からなる26分の作品。本日は、即興の要素も含まれる第1楽章をお届けします。

www.alarconmusic.com (T)

ルイス・セラーノ・アラルコンは、スペインのヴァレンシアで生まれ、チバの音楽協会で作曲、管弦楽法、ソルフェージュ、音楽理論、移調、初見演奏、ピアノ教育法を学んだ。作品はこれまでに30カ国以上で演奏され、スペイン、イタリア、シンガポール、アメリカ、コロンビア、香港などに指揮者として招かれた。2006年と2009年に行われたイタリアのコレチャーノ国際吹奏楽作曲コンクールでは第1位を2度獲得した。

2011年から2013年まで、WASBEの理事も務めた。

2015年より「アラルコン・ミュージック」レーベルにて自作の出版を行い、2017年からはヴァレンシアの「ヴィッラー・デル・アルソビスポ」吹奏楽団の首席指揮者を務める。

現在は、ヴァレンシア専門音楽院でアナリーゼと作曲を教えている。

(S)

なお、アラルコン作品は、昨年度のグリーン・タイでもスペイン色強い『ドゥエンデ』を取り上げた。現在、欧米やアジア諸国などで人気の作曲家であり、7月は中国、8月にはシンガポールでも彼自身の指揮によるコンサートが予定されている。その合間を縫って、7月下旬に私的に初来日することとなった。同氏によるワークショップがグリーン・タイによって予定されている。

(I)

タイム・イントゥ・ミュージック (伊藤康英)

ティモシー・レイニッシュ氏の80歳を記念して作曲。

80歳というところに思い浮かぶのが、老ヴェルディが80をこえて尚、旺盛な作曲意欲の中に書き上げた最後のオペラ『ファルスタッフ』。うむ、あのファルスタッフのふくやかな体型はティムと似ているぞ、ということはさておき、このオペラのように平明なハ長調の音楽を詠えることにした。

冒頭の8分音符のフレーズは、繰り返されるごとにフレーズが長くなる。これは、『萬葉集』冒頭を飾る雄略天皇の御歌で「こもよ みこもち ふくしもよ みふくしもち」と一音ずつ増える手法をもって寿いだという説に擬えた。

そして途中には、オペラ『ファルスタッフ』の最後を締めくくるフーガの歌い出しのフレーズ「Tutto nel mondo è burla (世の中すべて冗談だ)」を引用した(譜例4)。

譜例4 オペラ「ファルスタッフ」幕切れのフーガ主題

G. Verdi

Tut-to nel mon-do è bur-la, L'uom
è na-to bur-lo-ne, bur-lo-ne, bur-lo-ne,

このタイトルを日本語に訳すと「音楽への時間」すなわち「楽興の時」といったところだろう。優しいメロディーで全曲を満たした6分弱の小品。

ちなみに、タイトルの中に「TIM」が隠れていることにはお気づきでしょうか。

2018年6月17日、レイニッシュ氏指揮のシンガポールのフィルハーモニック・ウインズにより世界初演。本日が日本初演。

さて、作曲者である私・伊藤康英は、先ごろフランスで行われたクードヴァン国際吹奏楽作曲コンクール(テーマは平和)にて、グリーン・タイが日本初演した『彼がわたしたちに語ったこと(Ce qu'il nous enseigna...)]の改訂版により第3位受賞。21世紀に入ってから、平和を願う作品を多く作曲しており、その集大成ともいえるオペラ『ある水筒の物語』(高木 達台本)を、来年5月31日、

6月1日初演に向けて作曲中。 www.itomusic.com (I)

ロム・アルメ(武装した人)変奏曲 (C.マーシャル)

本日のコンサートには、ティムの奥様であるヒラリーさんもお来場されている。お二人の第三男であるウィリアムさんは2001年にスペインのピレネー山脈にて逝去された。悲しみにくれるご夫妻は、多くの作曲家にウィリアムへの追憶として委嘱活動を行い、その数は20以上にのぼる。その中の一曲がこの『ロム・アルメ』。ギルドホール・シンフォニック・ウインド・アンサンブルにより、2003年、スウェーデンのイェンシェーピンにおけるWASBEにて初演。この作品は、作曲家としてのマーシャルの転換点になった作品である。

作曲者の解説を引く。

私がこの古いメロディー(譜例5)に基づいて作品を書くことに決めたとき、3つの競合する、明らかに互換性のない意図を関係づけなくてはならなかった。

第1に、歌詞の内容と、私が作曲していた時期とのこと。この作品は、イラク戦争前から戦争期間中にかけて作曲していたため、戦争という「制度」についての私の気持ちを表現したかった。

第2に、このメロディーは、その成立から5世紀以上にわたり何十人もの作曲家にインスピレーションを与えてきたため、先達たちの作曲技法のいくつかを取り入れることで、伝統を称えたかった。

譜例5 「ロム・アルメ(武装した人)」の主題

Anon.

L'hom-me, l'hom-me l'hom-me ar-mé L'hom-me ar-mé,
L'hom-me ar-mé doit on coub-ter, doit on doub-ter,
On a fait par-tout cri-er, Que chas-cun se viengne ar-mer d'un hau-bre-gon de fer
L'hom-me, l'hom-me l'hom-me ar-mé L'hom-me ar-mé,
L'hom-me ar-mé, L'hom-me ar-mé doit on coub-ter, L'hom-me ar-mé

第3として、この曲が「酒の歌」という由来も示す証拠もあるので、音楽が、楽しさと盛り上がりで満ちたものにもしたいということ。

作曲が続くにつれ、第1の意図は、第2、第3の意図に支配されていると感じていることに驚いた。しかしながら完成した作品には「戦争のテーマ」の痕跡が色濃く反映されることとなった。たとえば、冒頭と最後に現れるサイレンのようなモチーフ、テ・ラウバラハの戦争の歌『Kamate, Ka ora (カ・マテ、カ・オラ)』(訳注:「死ぬか、生きるか」といったところか。ニュージーランドのマオリ族の民族舞踊。サッカーの際に踊られることでも知られている)や、『Waiata tangi (ワイアータ・タンギ) (嘆きの歌)、そのほか、短いマーチや、葬送の行進など。

変奏曲という古くからの音楽形式を使ったことに、「音楽の伝統へのオマージュ」を見いだせる。この形式の中には可能性がたくさんある。(中略)

ピエール・デ・ラ・ルー (1460-1518)の言葉からの引用。

Extrema guadi luctus occupan (喜びの極端は悲しみを免れることができる)。

おそらく、戦争の悲しみに対する解毒剤の一つとして、それは音楽の喜びの中に見いだすことができるのかもしれない。

www.vaiaata.com

さて、実は洗足学園音楽大学ではマーシャル作品をすでに演奏したことがある。2005年、シンガポールでのWASBEに洗足の吹奏楽が参加した際、コンサートのほかにリーディング・セッションにて演奏した。新譜を次々と紹介紹介するセッションである。その際に洗足は、マーシャルの新作『Okaoka (オカオカ)』を演奏した。それをきいた私はすぐさま、洗足のフレッシュマン・ウインド・アンサンブルにて日本初演を行なった。

そして、おそらくこの『ロム・アルメ』は、日本初演になるのではと思われる。

(I)

クリストファー・マーシャルはフランスのパリに生まれ、オーストラリアとニュージーランドで教育を受けた。独学で作曲を学び、ロンドンのトリニティカレッジで名誉勲章を授与され、ピアノの指導者を務めた。音楽教師の資格に加え、英語教師の資格も取得している。

1994年にニュージーランド南島のオタゴ大学でモーツァルト・フェローシップの地位に2年間任命され、1995年にフィリップ・ニール音楽記念章を受賞した。

現在は、アメリカ合衆国フロリダ州のオーランドに拠点を置いて作曲活動を行っている。

(S)

解説執筆: (T) …ティモシー・レイニッシュ (I) …伊藤康英

(Y) …山本康平 (S) …坂本真優



指揮:ティモシー・レイニッシュ／藤岡幸夫
2017年6月22日公演より



洗足学園音楽大学グリーン・タイ ウインド・アンサンブル

Senzoku Gakuen College of Music Green-Tie Wind Ensemble

学園の色の一つ「緑」を冠した吹奏楽団。2009年、伊藤康英（本学教授）と共に始動。本年度で10年目を迎えた。

作曲家の視点を交えた楽曲分析やこだわりの選曲が特徴。これまでに、ダグラス・ボストック、ティモシー・レイニッシュ、藤岡幸夫、秋山和慶、増井信貴、本名徹次といった名だたる指揮者を招聘。海外交流も積極的に行い、台湾、シンガポール、韓国にて交流演奏会を持つ。2016年には沼津（静岡県）公演を行った。2017年、WMC国際指揮コンクール予選マスタークラスのモデルバンドを務めた。藤岡幸夫氏がナビゲーションを務めるBSジャパン「エンター・ザ・ミュージック」にもたびたび出演。その他、福島県の伊達市歌レコーディングなど、活発な活動を行う。指導陣には、斯界で知られる近藤久敦（本学講師）、仲田守（本学講師）を配し、アカデミックコーディネーターとして福田昌範（本学講師）を擁する。

2018年3月には、台湾の清華大学との合同演奏会を台湾にて開催し、高評を博した。

【Concertmistress】	楠瀬 有紀					
【Inspector】	高橋 愛美	川瀬 快	加賀美 諄			
【Flute】	磯 茉莉枝 坂上 葉	加藤 千緩 甲斐 真琴	高橋 愛美 佐々木 美緒	土屋 幸祐 谷野 菜月	堤内 なお 村松 紀親	前原 希美*
【Oboe】	柿沼 彩伽 伊藤 楓子	前田 樹里 上原 史織	三輪 桃子 末松 美香	持田 夏希*	朝日 可奈子	伊織 鈴奈
【Clarinet】	寺崎 翔也 吉澤 楓 長岡 瑠奈♪	釜田 早希 杉浦 宝瑠 石井 綾菜♪	寺本 理菜 田代 三葉 于 泰丹陽(院1)♪	中林 真優 冨木 俊陽	濱田 有希乃* 原田 優	二瀬 結衣 松井 泰介
【Bassoon】	大内 麻央	高橋 遥	福原 佑紀♪			
【Saxophone】	阿南 ひかる 迫間 美和 松下 沙世	荒木 真寛 金子 由希絵 山本 康平	内山 初音* 佐藤 志織	北野原 由依 渋谷 優花	坂本 真優 菅野 佑香	野中 芽維 飛澤 伽奈

【Horn】	五田市 玲* 柿島 結人	菅野 翔平 佐藤 駿	鈴木 ほのか	服部 光政	赤城 和奏	菊地 夏実
【Trumpet】	大河原 健太郎 岸 実咲 山内 菜摘	杉山 栄 國米 晴貴	田中 理恵* 藤井 綺花	古川 晴菜 松本 奏太郎	古田 萌々花 井上 優希	松永 早紀 高倉 綾乃
【Trombone】	岡村 麻央* 南崎 直子	川瀬 快 盛喜 麻衣	山本 有彩 山口 智代	荒谷 悠斗	日比野 龍人	鷗飼 杏
【Euphonium】	大西 礼美	古賀 光紗*	高原 百合香	春原 佑香	本谷 梨香	
【Tuba】	佐藤 航平*	島 守礼	廣野 健太	加藤 惇	長房 美久	
【Contrabass】	田中 麻由*	村松 岳	江頭 輝♪			
【Percussion】	加賀美 諄* 山田 祐佳 高山 かほ	吉野 海美 青柳 はる夏	刈部 亜富夢 松田 紗枝	須藤 愛佳 鈴木 脩平	辻本 智裕 山本 晃弘	廣田 雅也 脇坂 詩織
【Piano】	岡南 健#					
【Harp】	大隅 レオナ♪					

#…演奏補助要員

♪…賛助

*…パトリリーダー

【宣伝・広報】	松永 早紀	杉山 栄	柿沼 彩伽	中林 真優	日比野 龍人
【ライブラリアン】	菅野 佑香	飛澤 伽奈	岸 実咲	藤井 綺花	
【プログラム】	山本 康平	坂本 真優			
【セッティング】	坂上 葉	菊池 夏実	加賀美 諄		
【渉外】	廣野 健太	國米 晴貴			

合奏指導教員	伊藤 康英	仲田 守	近藤 久敦
企画運営責任者	伊藤 康英		
アカデミックコーディネーター	福田 昌範		
授業助手	大沼 亜衣		

Special Thanks to 藤岡 幸夫(関西フィルハーモニー管弦楽団首席指揮者)

グリーン・タイ ウインド・アンサンブル最新情報やメッセージをSNSで続々配信中!



Facebook



Twitter



Instagram

今後のグリーン・タイ ウインド・アンサンブルの演奏会

2018年12月11日(火) 18:30開演 (18:00開場)

会場:洗足学園前田ホール 指揮:ダグラス・ボストック 全席自由1,000円

～グリーン・タイ10周年記念～

吹奏楽の古典名曲を名匠ボストックと Vol.9
Douglas Bostock Presents Masterworks for Winds Vol.9

リジョイス! -祝賀

Rejoice!

プログラム

伊藤康英／吹奏楽のための祝祭曲「集え、祝え、歌え」

O.ヴェスビ／讃歌

J.シュテルト／パッサザイツ

A.ホヴァネス／交響曲第53番「星の燭光」

V.ネリベル／S-S-S(砂粒・静けさ・寂しさ)(日本初演)

真島俊夫／三つのジャボニスム

～またのご来場をお待ちしております～



洗足学園音楽大学

ひと、音楽、未来、世界をつなぐ。

洗足学園音楽大学は、音楽の学びと実践を通じて、
豊かな社会づくりに貢献します。